

## はじめに

筆者が仕事として初めて文章を書いたのは、1980年のことです。当時はワープロなどもまだ普及しておらず、手書きの文章を何度も書き直して上司にレビューをお願いしました。書類を見たときの上司の顔、短い文章にもかかわらずコメントするまでの時間の長さは、今でも忘れられません。

情報処理技術者試験対策のセミナーの案内を見て、システム監査技術者試験の受験勉強を始めたのは、1987年のことでした。添削用の論文を1本書けばよいのに3本も書いて講師を困らせていました。

その後、ワープロが普及し、「おまえは字が汚いから書類はワープロで書け」と上司に言われ、システム本部に1台しかないパソコンを占有して仕事をしていました。

日本語を知らない、あるいは、字が汚いにもかかわらず、論文対策の講義や、論文の書き方の本を出版するという仕事がいただけるのは、情報処理技術者試験のおかげです。試験勉強は、情報処理に関する能力の向上にとどまらず、日本語力や他人を納得させる力も併せて向上させ、社外における人間関係も広がりました。このような効果は筆者だけでなく、他の受験者にもいえます。毎年、情報処理技術者試験をきっかけにして勉強が好きになり、上級の試験に合格した方からメールをいただいています。

近年、情報処理技術者試験の受験者数が低下しています。この試験によって社会に出てからの勉強の楽しさを知った者にとって、この傾向は残念なことです。情報処理技術者試験の受験者数の減少傾向については、筆者の力の及ぶところではありませんが、論述式試験のもつイメージの敷居を低くすることによって、既に情報処理技術者試験に合格している方に、更に上級の試験にチャレンジしてもらいたいと考え、この本を執筆していきます。

上級の情報処理技術者試験の合格者が増え、合格者が組織で活躍することによって、必ずこの試験が見直され、受験者数の減少傾向が反転します。読者と情報処理技術者試験に携わる全ての人が幸せになることを願っています。

字がきれいに書けない方も安心してください。筆者の講師経験から100人中98人は、筆者よりも読みやすい字を書きます。パソコンが普及して手書きで文章を書くことに慣れていない方も安心してください。この本は作文を書くことから始めています。この本に書かれた訓練を繰り返すことによって、合格レベルの論文が書けるようになります。

この本を出版するに当たって、過去に論文のイロハを指導して下さった宇佐美博先生，並びにアイテックの皆様へ感謝します。

なおこの本は，システム監査の用語の説明については，特に触れていません。午前Ⅰ・Ⅱ，午後Ⅰ問題の対策の際には，システム監査の重要なキーワードを論述に使うことを念頭に置いて学習してください。その際，システム監査学会のシステム監査用語研究プロジェクトが発表した「システム監査用語の定義と解説」([http://www.sysaudit.gr.jp/seika/yougo\\_kaisetsu.pdf](http://www.sysaudit.gr.jp/seika/yougo_kaisetsu.pdf))が役に立つと思います。また，本試験問題に対応した，専門家による論文事例を収録しています。一つの問題に対して専門知識や経験をどのように表現すればよいか，ぜひ参考にしてください。

2017年9月吉日

岡山昌二

# 目次

はじめに

## 第1部 合格論文の書き方

### 第1章 本書を手にしたら読んでみる

- 1.1 効果を出すことに急いでいる方は読んでみる ..... 12
- 1.2 大人の学習を後押しする理由をもってみる ..... 19
- 1.3 情報処理技術者試験のマイナスイメージを払拭してみる ..... 21
- 1.4 “小論文なんて書けない”について考えてみる ..... 24
- 1.5 本書の第一印象を変えてみる ..... 27

### 第2章 論述式試験を突破する

- 2.1 論述式試験とは何なのか ..... 30
- 2.2 採点者を意識して論述する ..... 35
- 2.3 論述式試験突破に必要な要素を明らかにする ..... 40
- 2.4 論文を評価する ..... 43

### 第3章 基礎編

- 3.1 五つの訓練で論文が書けるようになる ..... 50
- 3.2 【訓練1】「作文」や「論文ふう」の文章を書く ..... 51
- 3.3 【訓練2】トピックを詳細化して段落にする ..... 56

### 第4章 論文を作成する際の約束ごとを確認する

- 4.1 試験で指示された約束ごとを確認する ..... 64
- 4.2 全試験区分に共通する論述の約束ごとを確認する ..... 70

### 第5章 論文を設計して書く演習をする

- 5.1 【訓練3】問題文にトピックを書き込む ..... 74
- 5.2 【訓練4】ワークシートに記入する ..... 78

5.3	【訓練5】ワークシートを基に論述する	86
-----	--------------------	----

## 第6章 書き直してみる

6.1	添削を受けて論文を書き直す	94
-----	---------------	----

## 第7章 午後Ⅰ問題を使って論文を書いてみる

7.1	問題の出題趣旨を確認する	110
7.2	論述式問題を確認する	116
7.3	論文ネタの収集演習をする	118
7.4	論文ネタを確認する	121

## 第8章 本試験に備える

8.1	2時間で論述を終了させるために決めておくこと	126
8.2	試験前日にすること	130
8.3	本試験中に困ったときにすること	132

## 第9章 受験者の問題を解消する

9.1	学習を始めるに当たっての不明な点を解消する	136
9.2	学習中の問題を解消する	141
9.3	試験前の問題を解消する	150
9.4	不合格への対策を講じる	152

## 第2部 論文事例

### 第1章 計画と組織

平成23年度 問3

システム開発におけるプロジェクト管理の監査について	158
---------------------------	-----

論文事例：岡山 昌二	159
------------	-----

## 第2章

### 調達と導入

---

平成 26 年度 問 1	
パブリッククラウドサービスを利用する情報システムの 導入に関する監査について .....	166
論文事例：落合 和雄 .....	167
平成 25 年度 問 3	
ソフトウェアパッケージを利用した基幹系システムの 再構築の監査について .....	172
論文事例：岡山 昌二 .....	173
平成 23 年度 問 2	
ベンダマネジメントの監査について .....	178
論文事例：樺沢 祐二 .....	179
平成 22 年度 問 3	
IT保守・運用コスト削減計画の監査について .....	184
論文事例：岡山 昌二 .....	185
平成 21 年度 問 3	
企画・開発段階における情報システムの信頼性確保に関する システム監査について .....	190
論文事例：岡山 昌二 .....	191

## 第3章

### サービス提供とサポート

---

平成 29 年度 問 1	
情報システムに関する内部不正対策の監査について .....	196
論文事例 1：岡山 昌二 .....	197
論文事例 2：落合 和雄 .....	202
平成 28 年度 問 2	
情報システムの設計・開発段階における品質管理に関する 監査について .....	208
論文事例 1：岡山 昌二 .....	209
論文事例 2：落合 和雄 .....	214
平成 27 年度 問 1	
ソフトウェアの脆弱性 <sup>ぜい</sup> 対策の監査について .....	218
論文事例 1：岡山 昌二 .....	219
論文事例 2：落合 和雄 .....	224

平成 26 年度 問 2	
情報システムの可用性確保及び障害対応に関する監査について	230
論文事例：岡山 昌二	231
平成 25 年度 問 1	
システム運用業務の集約に関する監査について	236
論文事例：長嶋 仁	237
平成 25 年度 問 2	
要件定義の適切性に関するシステム監査について	242
論文事例：岡山 昌二	243
平成 24 年度 問 2	
システムの日常的な保守に関する監査について	248
論文事例：岡山 昌二	249
平成 24 年度 問 3	
情報システムの冗長化対策とシステム復旧手順に関する 監査について	254
論文事例：岡山 昌二	255
平成 22 年度 問 1	
情報システム又は組込みシステムに対する システムテストの監査について	260
論文事例：落合 和雄	261
平成 21 年度 問 1	
シンクライアント環境のシステム監査について	266
論文事例：岡山 昌二	267

## 第 4 章

### モニタリングと評価

平成 29 年度 問 2	
情報システムの運用段階における情報セキュリティに関する 監査について	274
論文事例 1：岡山 昌二	275
論文事例 2：落合 和雄	280
平成 28 年度 問 1	
情報システム投資の管理に関する監査について	284
論文事例 1：岡山 昌二	285
論文事例 2：落合 和雄	290

平成 27 年度 問 2	
消費者を対象とした電子商取引の監査について .....	296
論文事例 1：岡山 昌二 .....	297
論文事例 2：落合 和雄 .....	302
平成 24 年度 問 1	
コントロールセルフアセスメント（CSA）とシステム 監査について .....	308
論文事例：落合 和雄 .....	309
平成 23 年度 問 1	
システム開発や運用業務を行う海外拠点に対する 情報セキュリティ監査について .....	314
論文事例：岡山 昌二 .....	315
平成 22 年度 問 2	
電子データの活用にかかわるシステム監査について .....	320
論文事例：岡山 昌二 .....	321

## 第 5 章

### システム監査の専門能力

---

平成 21 年度 問 2	
システム監査におけるログの活用について .....	328
論文事例：岡山 昌二 .....	329
平成 19 年度 問 1	
システム監査における IT の利用について .....	334
論文事例：落合 和雄 .....	335

事例作成者の紹介と一言アドバイス .....	340
------------------------	-----

参考文献

巻末ワークシート

# 1.1

## 効果を出すことに急いでいる方は読んでみる

本書を手に行っている皆さんの中には、“明日が試験の本番なので初めて本書を手に行っている”，“通信教育で添削してもらうための論文を急いで書かなければならない”，という方がいると思い，第1章を書いてみました。

その前に重要事項の確認です。午後Ⅱ論述式試験の問題冊子の注意事項には，「**問題文の趣旨に沿って解答してください**」と解答条件が書かれています。この意味を正確に理解しましょう。次にシステム監査技術者試験の平成29年春午後Ⅱ問2を示します。

### システム監査技術者試験 平成29年春 午後Ⅱ問2

#### 問1 情報システムの運用段階における情報セキュリティに関する監査について

企業などでは，顧客の個人情報，製品の販売情報などを蓄積して，より良い製品・サービスの開発，向上などに活用している。一方で，情報システムに対する不正アクセスなどによって，これらの情報が漏えいしたり，滅失したりした場合のビジネスへの影響は非常に大きい。したがって，重要な情報を取り扱うシステムでは，組織として確保すべき情報セキュリティの水準（以下，セキュリティレベルという）を維持することが求められる。

情報セキュリティの脅威は，今後も刻々と変化し続けていくと考えられるので，情報システムの構築段階で想定した脅威に対応するだけでは不十分である。例えば，標的型攻撃の手口はますます高度化・巧妙化し，情報システムの運用段階においてセキュリティレベルを維持できなくなるおそれがある。

そこで，情報システムの運用段階においては，セキュリティレベルを維持できるように適時に対策を見直すためのコントロールが必要になる。また，情報セキュリティの脅威に対して完全に対応することは難しいので，インシデント発生に備えて，迅速かつ有効に機能するコントロールも重要になる。

システム監査人は，以上のような点を踏まえて，変化する情報セキュリティの脅威に対して，情報システムの運用段階におけるセキュリティレベルが維持されているかどうかを確かめる必要がある。

あなたの経験と考えに基づいて，設問ア～ウに従って論述せよ。

**設問ア** あなたが関係する情報システムの概要とビジネス上の役割，及び当該情報システムに求められるセキュリティレベルについて，800字以内で述べよ。

**設問イ** 設問アを踏まえて，情報システムの運用段階においてセキュリティレベルを維持できなくなる要因とそれに対するコントロールを，700字以上1,400字以内で具体的に述べよ。

**設問ウ** 設問イで述べたコントロールが有効に機能しているかどうかを確認する監査手続を，700字以上1,400字以内で具体的に述べよ。



問題の後半部分を見ると、「設問ア」、「設問イ」、「設問ウ」で書き始めている“設問文”があります。その直前に「あなたの経験と考えに基づいて、設問ア〜ウに従って論述せよ」と書かれています。問題文の趣旨とは、問題の最初から「あなたの経験と考えに基づいて、設問ア〜ウに従って論述せよ」と書かれているところまでです。

問題文の趣旨に沿って論述することについて、具体的に確認してみましょう。まず、採点者から趣旨に沿っていないと判断される論文について確認します。ここでは分かりやすいように、設問イの後半に着目して説明します。

設問イの後半では、“情報システムの運用段階においてセキュリティレベルを維持できなくなる要因とそれに対するコントロール”について問われています。これに対応する問題文の趣旨を確認すると、「情報システムの運用段階においては、セキュリティレベルを維持できるように適時に対策を見直すためのコントロールが必要になる。また、情報セキュリティの脅威に対して完全に対応することは難しいので、インシデント発生に備えて、迅速かつ有効に機能するコントロールも重要になる」と記述されています。このように、問題文の趣旨に沿って論述するためには、設問文のキーセンテンスと、問題文の趣旨にある文章との関連付けが必須となります。

採点者から趣旨に沿っていないと判断される論文は、設問文だけに着目して論文を設計した論文です。設問イの後半において、“情報システムの運用段階において情報セキュリティレベルを維持できなくなる要因とそれに対するコントロール”だけに着目してしまい、例えば、「アクセスコントロールの見直しにかかわるコントロール」について書けばよい、と考えしまいます。これだけでは問題文の趣旨に沿った論文にはなりません。

問題文の趣旨に沿うためには、問題文の趣旨に沿って、セキュリティレベルを維持できるように適時に対策を見直すためのコントロールと、インシデント発生に備えて、迅速かつ有効に機能するコントロールの両方について論じる必要があることが分かります。

## (1) 合格論文の書き方の概要

本番の試験では、設問文に沿って章立てをします。図表 1-1 に、問題文を使った章立ての例を示します。いろいろ記入されていますが、設問文に着目すれば、設問文に沿った章立ての仕方が分かるでしょう。「1.2」などと記入している意味は、「第1章 第2節」という章立てであると考えてください。前述のとおり、この問題では、コントロールを二つの観点から論じることが求められています。そこで、「2.2-1」などと記入して、コントロールの一つ目の観点であることを示しています。

論述の方向性としては、自分の経験を当てはめる努力をするより、設問に答えるように、かつ自分の経験や専門知識を使って、問題文の趣旨を膨らませるように書いてみましょう。その際、専門家としての考えや、そのように考えた根拠を採点者にアピールことが重要です。論文ですから、①「思う」は使わない、②段落の書き始めは字下げをして読みやすく構成する、③行の書き始めが句読点になる場合は、前の行の最終の1マスに文字と句読点の両方を入れる禁則処理をする、などに気をつけましょう。

もう少し、合格論文の書き方について学習してみましょう。論述式試験を突破できない論文と突破できる論文の傾向について、図示しながら説明します。

## 問2 情報システムの運用段階における情報セキュリティに関する監査について

企業などでは、顧客の個人情報、製品の販売情報などを蓄積して、より良い製品・サービスの開発、向上などに活用している。一方で、情報システムに対する不正アクセスなどによって、これらの情報が漏えいしたり、滅失したりした場合のビジネスへの影響は非常に大きい。したがって、重要な情報を取り扱うシステムでは、組織として確保すべき情報セキュリティの水準（以下、セキュリティレベルという）を維持することが求められる。

情報セキュリティの脅威は、今後も刻々と変化し続けていくと考えられるので、情報システムの構築段階で想定した脅威に対応するだけでは不十分である。例えば、標的型攻撃の手口はますます高度化・巧妙化し、情報システムの運用段階においてセキュリティレベルを維持できなくなるおそれがある。

そこで、情報システムの運用段階においては、セキュリティレベルを維持できるように適時に対策を見直すためのコントロールが必要になる。また、情報セキュリティの脅威に対して完全に対応することは難しいので、インシデント発生に備えて、迅速かつ有効に機能するコントロールも重要になる。

システム監査人は、以上のような点を踏まえて、変化する情報セキュリティの脅威に対して、情報システムの運用段階におけるセキュリティレベルが維持されているかどうかを確かめる必要がある。

あなたの経験と考えに基づいて、設問ア～ウに従って論述せよ。

設問ア あなたが関係する情報システムの概要とビジネス上の役割、及び当該情報システムに求められるセキュリティレベルについて、800字以内で述べよ。

設問イ 設問アを踏まえて、情報システムの運用段階においてセキュリティレベルを維持できなくなる要因とそれに対するコントロールを、700字以上1,400字以内で具体的に述べよ。

設問ウ 設問イで述べたコントロールが有効に機能しているかどうかを確認する監査手続を、700字以上1,400字以内で具体的に述べよ。

図表 1-1 問題文を使った章立ての例

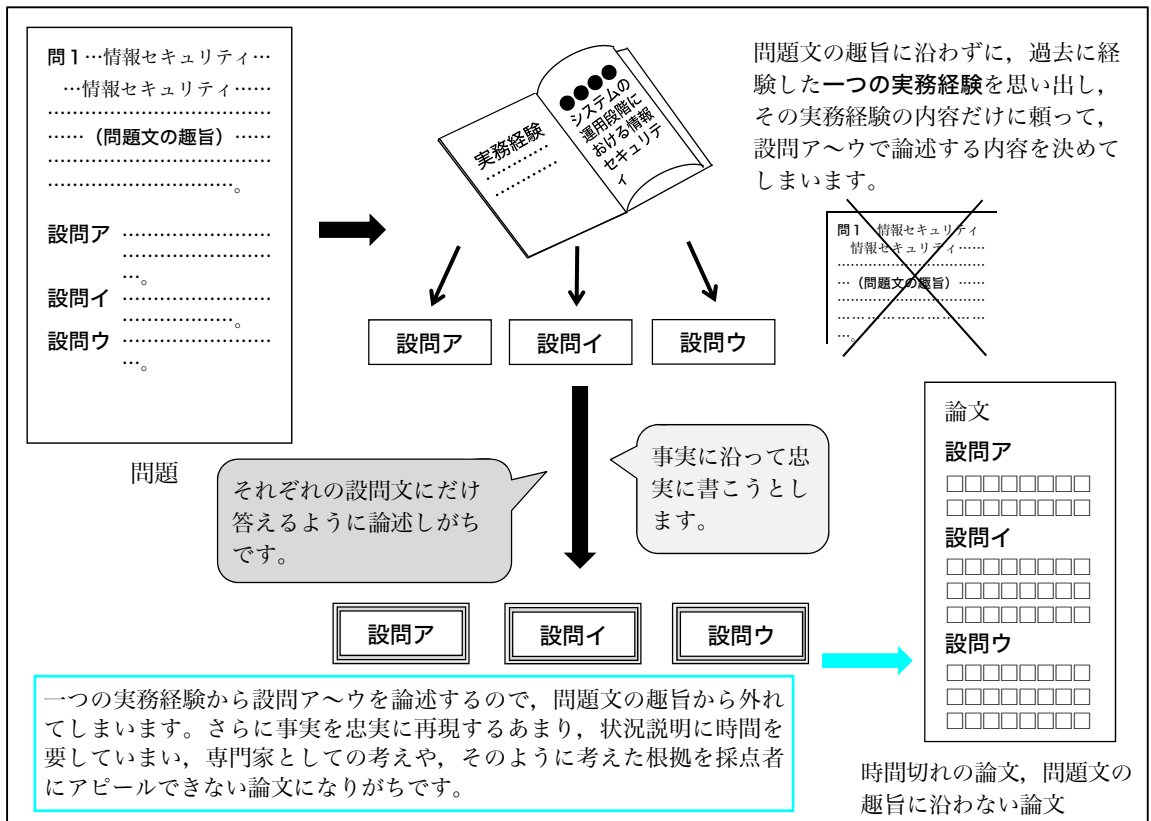
## (2) 論述式試験を突破できない論文の傾向

皆さんの多くが理想とする小論文の書き方は、既に経験した、論文の題材となる、ある一つのシステム開発や、システム監査の事例を、問題文の趣旨に沿いながら、設問ア、イ、ウの内容に合わせるように書くことではないでしょうか。しかし、現実にあった事例を、論文に当てはめようすると、事例の状況などの説明に時間がかかり、時間内に書き終えて設問で問われている内容には答えていたとしても、問題文の趣旨に沿っていない、合格には難しい論文になってしまうことがあります。

自分の経験した事例をそのまま書こうとすると、状況説明のための論述に時間がかかって専門家としての能力を採点者に十分アピールできないなどの弊害が生まれます。これについて、少し考えてみましょう。図表 1-2 に“時間切れになる論文や問題文の趣旨に沿わない論文の書き方”を示します。どうでしょうか。このような書き方をしていないでしょうか。

採点者に対して合格をアピールするための論述では、もう一つ、注意すべき点があります。過去に出題された設問イの多くは、前半と後半の問いに分けることができます。例えば、前半では“リスク”，後半では“リスクに対するコントロール”があります。このような場合、多くの受験者は、前半に注力して早く 700 字を越えようとします。その結果、採点者が重視する“リスクを踏まえたコントロール”などの後半の問いに対する論述が手薄になります。これでは合格が難しくなります。したがって、多くの問題の**設問イでは、前半でなく後半に注力することが重要**です。

論述式問題の多くの問題では、設問イはリスクやコントロール、設問ウでは監査手続について問われています。筆者は経験的に、設問イで問われるリスクやコントロールより、設問ウで問われる監査手続を厚く論じることが合格には効果的、言い換えると監査手続を厚く論じることが重要と考えています。



図表 1-2 時間切れになる論文や問題文の趣旨に沿わない論文の書き方

### (3) 論述式試験を突破できる論文の傾向

論述式試験を突破する方法は複数あります。本書では、複数あるうちの一つを紹介しています。

図表 1-3 に“問題文の趣旨に沿う論文の書き方”を示します。章立てをしながら、設問の問いの内容と、問題文の趣旨の各文章を対応付けします。すなわち、問題文の趣旨を参考にして、トピック（＝各設問で書く内容）を決めます。なお、トピックとは、話題、テーマ、論題を意味します。本書ではトピックを、例えば「CSIRT のメンバは、インシデントのトリアージを適切にできるスキルを有する、及び、トリアージの結果に基づき、エスカレーションなどの適切なインシデントレスポンスを行う、というコントロールが重要となる」などの論述のネタと考えてください。このように論文を設計して、論述の際には、自分が経験した論文の題材や、学習して習得した専門知識を使って、トピックを詳細に書きます。このとき、論文の題材は、皆さんが経験した複数の事例から、使えるところを引用してもよいでしょう。

なお、複数の事例や専門知識を引用などすると、論文としての一貫性が欠如するかもしれません。一貫性については、設計時ではなく、論述の際に確保します。場

# 7.1

## 問題の出題趣旨を確認する

あるとき知人と会う機会があり、論文がある試験区分の合格者である A 君が同席しました。

A 君：「岡山さん、どうしよう。合格しちゃいました。部長に“情報処理の論文がある試験なんて、受からないです”と言って、情報処理技術者試験以外の講習会を申し込んでいるのです。」

私：「会社では、論文がある試験区分の試験合格か、もう一方の資格試験の合格か、どちらかが必須なのですね。情報処理試験の方に合格したので講習会への参加が不要になったということですか。」

この後に A 君は、“記述式問題のネタを使って、論述テクニックを活用しながら論文を書いて合格できた”と言っていました。ここで注意したいことは、“A 君は論述テクニックを取得済み”ということです。論述テクニックについては、既に説明していますから、この章では、論文の書き方ではなく、A 君を合格に導いた、**記述式問題から論文ネタを収集する**点に絞って説明します。

### (1) この章の流れを確認する

まずは、この章全体の説明の流れを確認しておきましょう。

#### ① 対象とする記述式問題と論述式問題の出題趣旨の確認

午後 I 問題を使って論文を書いてみるためには、論文ネタを収集するための記述式問題と、論述するための論述式問題を決める必要があります。決める際には、試験センターが発表している出題趣旨を確認するとよいでしょう。

#### ② 記述式問題を演習する

まずは、通常の問題演習のように、記述式問題を解いてみましょう。理由は、本試験問題の数は限られているので、まずは午後 I 試験対策として問題を有効に活用するためです。本書には、論文ネタの収集の対象となる問題だけを掲載しています。解答は、IPA で公表している解答例を参照してください。

#### ③ 論述式問題を確認する

問題の趣旨や設問文をよく読み、趣旨や設問文において問うている内容を確認します。

#### ④ 論文ネタの収集演習をする

論述式問題において問われている内容を基に、午後 I 記述式問題から論文ネタを収集する演習を行います。その際、論文ネタとして不足している点や、記述式問題に書かれている内容と少し違う点があるかもしれません。これらについて

は、論述式問題で問われている内容に合わせて加工したり、不足している点を補足したりして、話の整合性を確保するようにしてください。

## (2) 対象とする記述式問題と論述式問題の出題趣旨の確認

ここでは、本試験問題を吟味して、次の二つの問題を選びました。

- ・記述式問題 平成 28 年 午後 I 問 3 「プロジェクト管理の監査」
- ・論述式問題 平成 23 年 午後 II 問 3 「システム開発におけるプロジェクト管理の監査」

なお、論文ネタを収集するだけでしたら、記述式問題だけで収集できます。では、それぞれの問題の試験センター発表「出題趣旨」を確認しましょう。

出題趣旨
大規模なシステム開発を行う場合に、システム部門やオーナ部門の体制が十分でないことがある。そのような場合に、プロジェクト管理業務を含め、開発業務を複数のベンダに委託することがある。とりわけ、プロジェクト管理業務については、それを委託したからといって、委託先間の調整、重要な計画変更、管理上の意思決定まで外部に依存してよいということではない。 本問では、発注者側の体制が十分でない場合の大規模システム開発プロジェクトを監査するに当たり、リスクと必要なコントロールを把握し、適切な監査要点及び監査手続を設定する能力を問う。

### 平成 28 年午後 I 問 3 の出題趣旨

出題趣旨の内容から、平成 28 年午後 I 問 3 には、開発業務を複数のベンダに委託した場合のリスクや、リスクに対するコントロールについて書いてあることが分かります。

出題趣旨
情報システムや組込みシステムの重要性の高まりに伴って、システム開発におけるプロジェクト管理が失敗した場合の影響はますます大きくなっている。また、開発手法の多様化やオフショア開発など、プロジェクト管理で対応すべき事項も増えてきている。 一方、プロジェクト管理の対象となるシステムの構成や開発の条件などは様々であるから、規程やルールどおりにプロジェクト管理を行っているかどうかの準拠性の監査だけでは、プロジェクトに特有のリスクを低減するためのコントロールが機能しているかどうかを判断できないおそれがある。 本問では、情報システムや組込みシステムの開発プロジェクトにおける特徴と、プロジェクトに特有のリスクを踏まえて、プロジェクト管理の適切性を監査するための見識や能力を問う。

### 平成 23 年午後 II 問 3 の出題趣旨

出題趣旨にある「プロジェクトに特有のリスク」に着目します。記述式問題に書かれている、開発業務を複数のベンダに委託しているというプロジェクトの特徴から「プロジェクトに特有のリスク」を論じることができそうです。

設問ア

第 1 章 情報システムの概要及び内部不正が発生した場合の影響

memo

1. 1 情報システムの概要

A 社は製薬会社であり研究開発費の予算管理を支援するプロジェクト予算システム（以下、予算システムという）を運用している。予算システムは A 社で開発され、研究開発プロジェクトで必要な物品・サービスの調達、及びプロジェクト別予算実績を管理している。

100字

予算システムは、発注処理、受入・検収処理、及びプロジェクト別実績管理処理で構成されている。各処理の画面における操作履歴は、ログとして管理され、システムの利用者に確認などの資料として渡されている。

200字

予算システムには、不正を予防する相互牽制のために、アクセスコントロールなどの技術的対策が講じられている。加えて、これら技術的対策と相互に機能する情報セキュリティ対策基準などの組織対策が施されている。

300字

1. 2 内部不正が発生した場合の影響

A 社の研究開発費は売上の 20% を占めるほど高額であるため、社員が架空発注を行うことで、現金をだまし取る詐欺行為などの内部不正が発生した場合、A 社は多額の被害を受けるといった影響がある。

500字

さらに、詐欺行為の事実が新聞報道された場合、組織の管理体制の不備や社員のモラルの低さが社会に露呈する。そのため、内部不正が発生した場合、製薬会社としての社会的信用が失墜するという影響がある。

600字

A 社の監査室では、このような企業における被害は、個人情報漏えい事件を引き起こした企業の例をみても大きいと判断した。そこで、予算システムのコントロールの有効性に関するシステム監査を実施することになった。私は、監査室のメンバとして、このシステム監査に加わった。

700字

800字

